



## 絵画史料と建物の復原

西 和夫（神奈川大学日本常民文化研究所・教授）

### 1 長崎の出島

長崎の出島は、江戸時代にオランダ商館が置かれた所としてよく知られている。当時は陸から突き出た人工の島だったが、明治に入って北と東が削られ、西と南は埋め立てられて、都市の中に飲み込まれてしまった。すぐ脇を市電が走り、島だった姿を思い浮かべるのはむずかしい。

江戸時代、出島は西欧の情報を受信する基地として大きな役割を果たした。オランダとの交易だけでなく、科学知識の最先端の場所でもあった。だから歴史上とても重要なのに、その割には実態が知られていない。その最大の原因は、都市に埋没して島の姿が消え、当時の建物も失われて様子が全くわからなくなったことである。

そこで長崎市は、島だったことをわからせるようにするとともに建物を復原し、オランダ商館の歴史を展示することにした。2000年春にヘトル部屋など5棟が復原され、今、カピタン部屋などさらに5棟の復原に向けて事業が進められている。

### 2 出島図

10年以上前のことだが、復原検討の委員会に私がはじめて出席して驚いたのは、もうすっかり復原が出来たかのような気持ちに委員の多くがなっていたことだ。みんなが口々に言う。あんなにたくさん出島を描いた絵がある。その通りに建てればいいのだから、復原は簡単だ。

確かに、出島の建物を描く絵は日本だけでなく世界各地にたくさんある。総称して出島図と呼ばれ、研究者の努力によって200点以上も収集された。資料集ともいべき『出島図 その景観と変遷』という立派な本も出版されている（長崎市出島史跡整備審議会編、中央公論美術出版、1987年初版、1990年改訂版）。収録されたカラー図版が、当時の建物の様子を実にわかりやすく示している。この通り建てればいい、と思うのも無理はない。委員たちは、「復原はもう出来たようなものだ。そこでこんなお土産を売ったらどうだろう」、「置く椅子は座りやす

いものにして下さいね」、などという意見を喜々として述べあっている。私が、絵があってもそれだけで復原できるわけではありませんよと言うと、座がすっかり白けてしまった。

### 3 歴史に忠実に

歴史的な建物の復原が近年あちこちで行われている。復原と名乗る以上、歴史に忠実な復原でなければならない。では、歴史に忠実とはどういうことか。

ひとつは復原の根拠がしっかり揃っていることだ。一般に、発掘成果・古写真・設計図・文献資料などが根拠に使われる。発掘で礎石等が出れば、建物の位置や大きさが判明する。古写真があれば建物の外観、大きさ、仕上げなどがわかる。設計図や文献によって詳細な様子を知ることも必要だ。

歴史に忠実に、そのもうひとつは、根拠をどう使い、どう設計するか、それを慎重に検討することだ。これは研究と呼ぶべき仕事である。時間をかけ、手を尽くして研究し、それをもとに設計することになる。

さて、出島の場合、出島図と呼ばれる絵がたくさんあるため、発掘が必要なことさえ忘れられていた。なにしろ絵は、立体的に描かれていて、とてもわかりやすい。しかし、このわかりやすさが問題だ。これさえあれば十分、と思いつまらせてしまうのだ。出島図のようなものを一般に絵画史料と呼ぶが、この絵画史料は、徹底した史料批判がぜひ必要である。

### 4 絵画史料の限界

出島図がそれぞれいつごろの状況を描いたものか、先学によって一応の検討がされている。それをもとにひとつひとつの建物ごとに、描写された姿を年代順に並べてみると、奇妙なことに気付く。

例えば建物の色だが、黄色から灰色に、次に黒になってまた黄色にもどるなど、色が次々に変わる。色だけではない。姿も、屋上に物見があつたりなかったり、窓が

あいていたりなくなったりする。時代によってそう変化したと素直に受取れば納得もいくが、同じ時代に色が違ったり姿が違ったりする。これはいったいどう考えたらよいか。

建物の例をふやして検討すればするほど矛盾がふえる。ここで気付くのだ。そうか、絵はやはり絵だ。描かれた状況がそのまま忠実だと受取るわけにはいかない。

復原検討チームの美術史の専門家がくり返し指摘したことだが、絵は写真のスナップショットとは違う。実際の姿を忠実に写し取ったものではない。絵を描いた人（作者）や注文主の意向・意志が必ず反映する。現在では写真さえ嘘をつくことが常識だ。その場になかったものをあとから追加したり、じゃまなものを消したりする。まして絵は、描き手（作者）が描きたいものを描きたいように描いたものだ。

もともと絵画は、先行する資料（それは絵だったり文献だったりするが）を反映して作られることが多い。絵はモザイクだったりパッチワークだったりする、とよく言われる通りなのだ。

出島図は、出島絵師と呼ばれた川原慶賀を中心とする工房の制作が多いようだが、一種のスーパーニール（お土産）で、建物を何色に塗るか、どんな形状にするか、適宜アレンジされた可能性が高い。買手が喜ぶようにと、それなりの工夫も凝らされただろう。

このように絵画史料は、復原資料としてはもともと限界をかかえているのだ。

## 5 復原された5棟の建物

ここまで見てくれば、絵があるからといって、そのまま復原できるわけではないことは明らかだろう。にもかかわらず、うっかりすると絵をそのまま信じ込むことがあるのは、絵の持つ魅力のなせるわざだ。文献の場合は厳密に史料批判するのに、絵画史料はそのまま信じてしまい勝ちなのだ。

そうは言っても、出島の場合、良好な復原資料が必ずしも十分ではなく、絵画史料を無視できない。慎重に、憶病なくらい慎重に、取り扱ったのであった。

幸いなことに、発掘によって建物の位置や規模、構造などがわかり、文献資料もあって参考にすることもできた。類例となる建物の調査も多数実施された。時代はやや降るが古写真も検討に加わった。これらがなければ、いくら絵画史料が豊富でも復原は無理だっただろう。

復原は、建築史・美術史・建築設計の専門家たちによる委員会によって慎重に検討され、実施された。具体的な様子は『長崎出島ルネサンス、復原オランダ商館』（戎光祥出版、2004年）に詳しいのでここでは省略しよう。今、大勢の人たちが復原されたオランダ商館の建物を訪れ、楽しんでいるようだ。

非文字資料のひとつである絵画について、出島の復原設計の場合を例にして述べた。もし出島に行く機会があったら、復原された建物をそのつもりでじっくり眺めていただければ幸いである。



2図とも工事報告書による

出島図の例  
(川原慶賀筆出島図・マンハイムライズ博物館蔵)



復原された建物  
(中央がヘトル部屋、その向こうに左から一番船船頭部屋・一番蔵・二番蔵、手前右が料理部屋)